

中島敦の「名人伝」

目次

序 中島敦の「名人伝」

一、 修行

二、 不射之射ふしや

三、 霍山かくざんの頂

四、 下山

五、 晩年

六、 結び

七、 本文

*
*

中島敦の「名人伝」

中島敦の「名人伝」

例えば、中島敦には『名人伝』という非常に有名な「短編小説」があるが、この「小説」（「名人伝」）などは、幅広い層の人たちに人気を持つ、まさに「傑作」の一つではないかと思う。そして、その本文は、次のような「内容」から始まるものである。

それは、「……趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己の師と頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとつては、名人・飛衛に及ぶ者があるうとは思われぬ。百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌は遙々飛衛をたずねてその門に入った」とある。

これは、非常に興味深い「文章」であり、それは、自分の人生の「師」を誰にするかは、その人の「人生」に決定的な「意味」を持つことになるのである。——例えば、木下藤吉郎は、最初は、今川義元の家来（松下加兵衛）に仕えたが、やがて「退転」（「解雇」）になり、次に、織田信長を選んで仕えることになる。この「判断」が、結果として、木下藤吉郎の「人生」をやがては「天下人」にまでのし上げる、まさに最初の「英断」となるのである。というのも、当時のほとんどの武将たちというのは、身分や家柄或いは地位やならわしなどを非常に重んじるタイプの人が多かったのに比べて、一方の織田信長という人は、身分や家柄或いは地位やならわしなどは全く無視した、まさに「実力主義的な」（或いは「現実主義的な」）考え方をするタイプの人であり、それゆえ、本来ならば、乞食のような百姓上がりの藤吉郎が、身分の高い織田信長のそばに直接仕えるなどということは、非常に難しい話であり、それを可能にしたのも、織田信長の、身分や家柄或いは地位やならわしなどを全く無視した、まさに「実力主義的な」（或いは「現実主義的な」）考え方によるのである。もちろん、藤吉郎は、ただ運がよかつただけではない。それだけでは、当然のことながら、天下人にはなれないのである。彼が優れていたのは、むろん、根っからの社交術に長けていたこともあるが、それに加えて、彼は、次から次へと状況に応じた「アイデア」を出し続けたことと、もう一つは、誰もが嫌がる、誰もが尻込みするようなことでも、彼は、自分から進んで、「……私にやらせて下さい、私が必ずやってみせます」と積極的に「行動（言動）」して、その結果を出して来たということ、誰もが彼（の存在）を認めざるを得ない状況を自ら創り出したということである。

一、修行

さて、本文に戻ると、それは、「……飛衛は新入の門人に、まず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで、そこに仰向けにひっくり返った。眼とすれすれに機躡が忙しく往來するのをじっと瞬かずに見詰めていようという工夫である。（中略）、来る日も来る日も彼はこの可笑しな恰好で、瞬きせざる修練を重ねる。二年の後には、遽だしく往返する牽挺が睫毛を掠めても、絶えて瞬くことがなくなった。彼はようやくやく機の下から匍出す。もはや、鋭利な錐の先をもって瞼を突かれても、まばたきをせぬまでになつて来た。（中略）、そして、ついに、彼の目の睫毛と睫毛との間に小さな一匹の蜘蛛が巣をかけるに及んで、彼はようやくく自信を得て、師の飛衛にこれを告げた……」。そして、「……それを聞いた飛衛がいう。瞬かざるのみではまだ射を授ける

に足りぬ。次には、視ることを学べ。視ることに熟して、さて、小を視ること大のごとく、微を視ること著のごとくとなつたならば、来つて我に告げるがよい」とある。

*

*

これは、非常に面白い「内容」であり、それは、なぜかと言えば、それは、宮本武蔵の『五輪書』の中にも、これと同じようなことが書かれているからである。それは、「兵法の身なりの事」という項目の中で、彼は、「……（姿勢を正しくし）、目の玉うごかざるやうにして、またゝきをせぬやうにおもひて、目をすこしすくめるやうにして、うらやかに見ることも也」とある。また、「兵法の目付といふ事」という項目の中でも、「……目の付けやうは、大きに広く付くる目也。観見二つの事、観の目つよく、見の目よはく、遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事、兵法の専（大事）也」とある。つまり、「身のあり方」というのは、まず、「……（姿勢を正しくし）、目の玉は動かさず、瞬きもしないやうにして、目を少し細めるやうにし、うらやかに（大らかに）見るやうにすること」。また、「……目の配り方は、大きくひろく配るやうにすること。観見二つの見方があるが、大事なのは、『観の目』（それは『全体を見る眼』を強くし、一方、『見の目』（それは『目の前の現象を見る目』は、弱くすること。そして、遠い所も近く見、近い所も遠く見る」こと。それは、カメラの「ズームような《眼》であれ！」ということである。

さて、その次の「目」の訓練方法は、本文では、「……紀昌は再び家に戻り、肌着の縫目から虱を一匹探し出して、これを己が髪の毛をもつて繋いだ。そうして、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮らすことにした。毎日毎日彼は窓にぶら下つた虱を見詰める。初め、もちろん、それは一匹の虱に過ぎない。二三日たつても、依然として虱である。ところが、十日余り過ぎると、気のせいか、どうやらそれがほんの少しばかり大きく見えて来たように思われる。三月目の終りには、明らかに蚕ほどの大きさに見えて来た。（中略）、そして、その虱も何十匹となく取換えられて行く中で、早くも三年の月日が流れた。ある日ふと気が付くと、窓の虱が馬のような大きさに見えていた。占めたと、紀昌は膝を打ち、表へ出る。彼は我が目を疑った。人は高塔であつた。馬は山であつた。その他、再び窓際の虱に立向い、燕角の弦に朔蓬の籥をつがえてこれを射れば、矢は見事に虱の心の臓を貫いて、しかも虱を繋いだ毛さえ断れぬ」とある。そして、「……紀昌は早速師の許に赴いてこれを報ずる。飛衛は高蹈して胸を打ち、初めて『出かしたぞ』と褒めた。そうして、直ちに射術の奥義秘伝を刺すところなく紀昌に授け始めた」とある。

さて、「……奥義伝授が始まってから十日の後、試みに紀昌が百歩を隔てて柳葉を射るに、既に百発百中である。二十日の後、いっばいに水を湛えた盃を右腕の上に載せて剛弓を引くに、狙いに狂いの無いのもとより、杯中の水も微動だにしない。一月の後、百本の矢を続けて射るに、次から次と矢の括に命中し、百本の矢は、一本のごとくに相連なり、的から一直線に続いた。傍で見ていた師の飛衛も思わず『善し！』と言つた」とある。むろん、漫画やアニメの世界であれば、このような「達人の妙技」は、十分あり得ることであるが、しかし、現実の世界では、なかなか難しいことになるのだろう。しかし、達人の域に達した「妙技」の凄さは、直に伝わって来るのではないかと思う。

さて、師から学ぶべき何もものも無くなつた時、彼の「頭の中」（或いは「心の中」）にふとよからぬ考えが浮かんだとある。それは、「……今や弓をもって己に敵すべき者は、師の飛衛を置いて他に無い。天下第一の名人となるためには、どうあつても飛衛を除かぬ

ばならぬ」と。それは、まさに「雌雄を決しなければならぬ」と決心した。そこで紀昌は、その機会を密かに狙っている、「……一日たまたま郊野において、向うからただ一人歩み来る飛衛に出遇った。とつさに意を決した紀昌が矢を取って狙いをつければ、その気配を察して飛衛もまた弓を執って相応ずる。二人互いに射れば、矢はその度に中道にして相対り、共に地に墮ちた。(中略)、さて、飛衛の矢が尽きた時、紀昌の方はなお一矢を余していた。得たりと勢込んで紀昌がその矢を放てば、飛衛はとつさに、傍なる野茨の枝を折り取り、その棘の先端をもってハッシと箆を叩き落とした。ついに非望の遂げられないことを悟った紀昌の心に道義的慚愧の念(それは「自分の行為を恥じる思い」が湧起った。一方、危機を脱し得た安堵と己が伎倆についての満足感から、敵に対する憎しみも消えて、二人は、互いに駈寄ると、野原の真中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた」とある。

二、不射之射

さて、ここまでの「内容」描写であれば、誰もが容易に描き得る弓の名人の「妙技の世界」の描写に過ぎない。つまり、それは、所詮「射此射」に過ぎない。しかし、中島敦の『名人伝』という作品の真に優れているところは、その「先の世界」(つまり「不射之射」の世界)まで描いているところにあるのである。それは、次のようなことである。——例えば、宮本武蔵の『五輪書』の中にも、「……我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。(中略)、廿一歳にして都へ上り、天下の兵法者にあひ、数度の勝負をけつすといへども、勝利を得ざるといふ事なし。其後国々所々に至り、諸流の兵法者に行合ひ、六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず(つまり、『負けることはなかつた』。其程、年十三より廿八、九迄の事也……)」とある。

そして、この「時期」こそは、まさに「太刀之太刀」であり、それは、まさに「自分の太刀を以て相手の太刀に勝つ」という世界である。もちろん、宮本武蔵は、この「段階」で満足することもなく、「……其後なをもふかき道理を得んと、朝鍛夕鍊してみれば、をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の此也。其より似來は、尋ね入るべき道なくして、光陰を送る」とある。——つまり、その後も、深き道理を得んと、朝鍛夕鍊することによつて、宮本武蔵の「太刀之太刀」は、さらに深き「熟練」(上達)を極めていくとともに、一方においては、「不太刀之太刀」をも身に付けるようになるのである。そして、五十歳の時に、まさに「兵法の道にあふ事」とあるが、それは、すなわち、まさに「兵法の奥義(神髓)を体得(会得)した」ということであり、それは、「太刀之太刀」だけではなく、実は、それに加えて、「不太刀之太刀」までも身に付けたということである。

それでは、その「絶対的証拠」となるものは、一体、どこにあるのかと問えば、その一つは、次のような文章の中にあるのである。つまり、「……この法を学び得ては、一身にして二十三十の敵にもまくべき道にあらず」(つまり「一人で二十人三十人の敵にも負けることがない」とある。これが、まさに「太刀之太刀」の深き「熟練」(上達)であり、いわば「優れた一大工師」である。一方、大勢の戦い(合戦)においては、「……善人を持つ事にかち、人数をつかふ事にかち、身をたゞしくおこなふ道にかち、国を治むる事にかち、民をやしなふ事にかち、世の例法をおこなふにかち、いづれの道におゐても、人に

まげざる所をしりて、身をたすけ、名をたすくる所、是兵法の道也……とある。これは、むしろ「不^ふ太^た刀^た之^の太^た刀^た」の深き「熟練」(上達)であり、それは、いわば、「優れた大工の統領」ということである。つまり、この「兵法」を真に「学び得て」は、一つは、真に「優れた大工師」になるとともに、もう一方では、真に「優れた大工の統領」にもなるということである。そして、前者は、太刀を直接使つて勝つ、まさに「太刀之太刀」であり、一方、後者は、太刀を直接使わずに勝つ、まさに「不^ふ太^た刀^た之^の太^た刀^た」である。——つまり、宮本武蔵という人は、若い時からの凄まじいまでの「武芸の修行」を何十年と続けたその結果、ただ単に「剣術」(武芸)が上達しただけではなく、それに加えて、人間としての総合的な「内的成長(成熟)」をも同時に遂げていたということである。

そして、もう一つの「絶対的証拠」となるものは、次のようなものである。一つは、「束を離す」という項目があり、それは、「……束をはなすとゆふに、色々心ある事也。無刀にて勝つ心あり、又太刀にてかたざる心あり。さまざま心のゆく所、書付くるにあらず。能々鍛錬すべし」とある。——これは、まさに「考え方」の根本からの「発想の転換」であり、例えば、武芸者たちは、どうしても「太刀」を使つて戦い、そして、その「太刀」で相手に勝つことばかりに囚^{とら}われている。しかし、「太刀」を使わずとも、敵と戦い、そして、その敵に勝つこともできないか? 或いは、太刀以外(或いは「武器」以外)の「その他の何らかの事や物」などを使つても、敵と戦い、そして、その敵に勝つこともできるのではないか? そのような根本からの「発想の転換」である。——すなわち、時には、「太刀」を直接使わずとも、敵に「勝つ方法」は、いくらでも(数多く)あるということである。もつと言えば、「……束を離すとは、すなわち、太刀を手から離し、その太刀を直接使わずとも、敵と戦い、その敵に勝つこともできる」ということである。そして、もう一つは、「岩尾の身」という項目があり、それは、「……岩尾の身とい事、兵法を得道して、忽ち岩尾のごとくに成りて、万事あたらざる所、うごかざる所、口伝」とある。——例えば、宮本武蔵という人は、若い時からの凄まじいまでの「武芸修行」を何十年と積み重ねた結果として、五〇歳の時に、まさに「兵法の奥義(神髓)」を体得(会得)した「こと」にうそはなく、その「山の頂上」へと終に到達して得た「心境」(つまりは「心身の状態」)を、まさに「岩尾」のようだと表現しているのである。それに加えて、「兵法三十五箇条」の三十四番では、次のようにも語っている。

つまり、「……岩尾の身と云は、うごく事なくして、つよく大なる心なり。身におのづから万理を得て、つきせぬ所なれば、生有る物は、皆よくる心有る也。無心の草木迄も、根ざしがたし。ふる雨、吹く風もおなじころなれば、此身能々吟味あるべし」とある。まず、この「文章」のなかで最も大事な「言葉」としては、それは、「……生有る物は、皆よくる心有る也。(それは)、無心の草木も、また、ふる雨、吹く風までもみな同じころなり」とある。つまり、長年の凄まじいまでの「武芸修行」の鍛錬の積み重ねによつて鍛え上げられた、その宮本武蔵の「心身の充実感」というものは、うそ偽りなく、まさに「……泰然自若として、如何なるものにも動じることのない、岩尾のような心身」になつていて、ただ、そこにいるというだけで、その「存在感」を醸し出しているとともに、誰もが気後れがしてよけるようになる。つまり、わざわざぶつかつて来るような人は、ほとんど誰もいなくなり、例えば、やくざな人が何か何ぐせをつけてぶつかつて来ても、少しも動じることなく、一にらみで、相手を退けてしまう。それは、何か得体の知れな

い大きな「氣」を感じて、安易に近づけないからである。つまり、「……相手と闘わずして、すでに相手に勝っている」ということであり、それが、まさに「不太刀之太刀」ということである。(例えば、そろばんの達人は、そろばんを使わずして、驚異の数を暗算で計算するようなものである。)

三、霍山の頂

さて、本文に戻りたいと思うが、それは、「……涙にくれて相擁しながらも、再び弟子がかかると企みを抱くようなことがあつては甚だ危ないと思つた飛衛は、紀昌に新たな目標を与えてその氣を転ずるにしくはないと考えた」とある。そして、飛衛は、「……爾がもしこれ以上この道の蘊奥(奥義)を極めたいと望むならば、西の方、霍山の頂を極めよ。そこには、甘蠅老師とて古今を曠しゆうする斯道(この道)の大家がおられるはず、老師の技に比べれば、我々の射のごときはほとんど児戯(子供の遊び事)に類する。爾の師と頼むべきは、今は甘蠅師の外にあるまい」とある。

そこで、紀昌は、すぐに西に向つて旅立ち、ひたすら道を急ぎ、一月の後、彼はようやく霍山の山頂(山頂)に辿り着いた。そして、「……氣負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかし酷くよぼよぼの爺さんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲がつているせいもあつて、白髯(白いひげ)は歩く時も地に曳きずつていよう。紀昌は、老人が聾(ろう)かも知れぬと思ひ、大声で来意を告げ、己が技の程を見てもらいたいむねを述べるが、相手の返事を待たずに、いきなり背に負つた弓を外して手に執つて、石礪の矢をつがえ、空高く飛び行く鳥の群に向つて狙いを定め、弓を引くと、「……一箭(一本の矢で)たちまち五羽の大鳥が鮮やかに碧空を切つて落ちて来た」とある。老人は、一通りは出来るようじやなど、穏やかに微笑を含んで言う。「……だが、それは所詮射之射というもの、好漢いまだ不射之射を知らぬと見える」とある。そこで、老人は、そこから二百歩ばかり離れた絶壁の上まで連れて来る。脚下は文字通りの断崖絶壁であり、遙か真下に糸のように細く見える溪流をちよつと覗いただけで、たちまち眩暈を感じるほどの高さである。その断崖から半ば宙に乗り出した危石の上につかつかと老人は駆上り、振返つて言う。どうじや、この石の上で先刻の業を今一度見せてくれぬか。紀昌は、石に乗り、弓を射ようとすると、石の微かに揺らいで小石の落ちるを見て、石の上に伏し、脚のワナワナ震る姿を見るや、老人は笑ひながら手を差し伸べて、彼に代わつて石の上に乗る。では、射というものをお目につけようかなと言つた。まだ動悸のおさまらぬ蒼ざめた顔をしていた紀昌は、すぐに氣が付いて言つた。しかし、弓はどうなさる？ 弓は？ 老人は素手だつたのである。弓？ と老人は笑う。弓矢の要る中はまだ射之射じや。不射之射には、烏漆の弓も肅慎の矢もいらぬ。(そして)、ちよつど彼等の真上、空の極めて高い所を一羽の鳶が悠々と輪を描いていた。その胡麻粒ほどに小さく見える姿をしばらく見上げていた甘蠅が、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月のごとくに引き締つてひようつと放てば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石のごとくに落ちて来るではないか。紀昌は慄然とした。今にして始めて芸道の深淵を覗き得た心地であつた。——そして、九年の間、紀昌はこの老名人の許に留まつた。その間いかなる修業を積んだものやらそれは誰にも判らぬ」とある。

* * *

例えば、スポーツの場合、現役時代というのは、誰でも相手とその「技」を直接競い合
つて、その「優劣」を決するという、まさに「射之射」(或いは「太刀之太刀」という
時代に相当するかと思う。しかし、やがて「現役」を引退して、例えば、監督やコーチに
なっていく場合、「現役時代」とはまた違う、いろいろなことを学ばなければならぬ。
——例えば、宮本武蔵は、「兵法」を「大工」にたとえて説いているのは有名であるが、
その場合、現役時代というのは、いわば「優れた大工師」の時代であり、一方、「監督
やコーチ」になるというのは、まさに大工の「統領」となることである。そして、その「統
領」が心得るべきことは、まず、各人の腕の「上中下」を熟知して、各人をそれに見合っ
た「適材適所」に配し、仕事が早くしかも手際よく進むようにすること。そして、何事も
手抜きを許さないこと。各人の「体用(たいゆう)」「心技体」の「体」を知ること。また、
各人の「気」「心技体」の「心」の「上中下」をよく見極めること。人々にやる気を起こ
させること。そして、無理(限度)を知り、敢えて「無理」をさせないこと。これらが大
工の「統領」の心得るべきこととした。そして、大工の「統領」になるためには、いわゆ
る「射之射」(或いは「太刀之太刀」)だけではなく、それに加えて、「不射之射」(或い
は「不太刀之太刀」)をも身に付ける必要があるということである。例えば、宮本武蔵の
「兵法」も、武士たるものは、文武両面に優れているのは言うまでもなく、それらに加え
て、様々な「諸芸・諸職」などにたずさわり(経験する)ことよって、それらの幅広い
「知識や技術」なども身に付けることとの相乗作用によつて、「太刀之太刀」だけでは
なく、それらに加えて、「不太刀之太刀」をも身に付けるようになることが大事になると
いうことである。

四、下山

さて、「……九年たつて山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付の変わったのに驚いた。以
前の負けず嫌いな精悍な面魂はどこかに影をひそめ、なんの表情も無い、木偶のごとく
愚者のごとき容貌に変わっている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はこの
顔付を一見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕のごとき、足下
にも及ぶものでないと。邯鄲の都は、天下一の名人となつて戻つて来た紀昌を迎えて、や
がて眼前に示されるに違いないその妙技への期待に湧返つた」とある。

ところが紀昌は一向にその要望に応えようとはしない。いや、弓さえ絶えて手に執ろうと
しない。山に入る時に携えて行つた「弓」もどこかへ棄てて来た様子である。そのわけ
を訊ねた一人に応えて、紀昌は懶げに言つた。「……至為は為す無く、至言は言を去り、
至射は射ることなし」と。「……なるほどと、至極物分りのいい邯鄲の都人士はすぐに合点
した。弓を執らざる弓の名人は彼等の誇となつた。紀昌が弓に触れなければ触れないほ
ど、彼の無敵の評判はいよいよ喧伝された」とある。

* * *

例えば、「詩人」にとつて、いわゆる「詩」を「書く必要」(或いは「書くこと」)がな
くなれば、それは、その「詩人」にとつての「最終地点」(或いは「極みの地点」)まで
到達したことであり、また、「小説家」にとつて、いわゆる「小説」を「書く必要」(或

いは「書くこと」がなくなれば、それは、その「小説家」にとつての「最終地点」(或いは「極みの地点」)まで到達したことである。同じように、「音楽(作曲)家」にとつて、いわゆる「音楽」を「書く必要」(或いは「書くこと」)がなくなれば、それは、その「音楽(作曲)家」にとつての「最終地点」(或いは「極みの地点」)まで到達したことであり、また、「画家」にとつて、いわゆる「描く必要」(或いは「描くこと」)がなくなれば、それは、その「画家」にとつての「最終地点」(或いは「極みの地点」)まで到達したことである、その他、それらは、すべて同じことである。

つまり、詩人であれ、小説家であれ、音楽家であれ、また、画家であれ、陶芸家であれ、その他、どのような分野の誰であれ、未だいろいろと「作りたいもの、書きたいもの」などがあるうちは、その道の「途上」にあるのであり、その道の「極まる、ところ」とは、すなわち、もう「……学ぶべき事も、書くべきことも、また、作るべきことも、その他、すべて尽きてしまう」ということである。——例えば、学問であれば、若い時からの凄まじいまでの「知識欲」が何十年と続いていたが、それが、突然、まさに「ばたつと止まってしまい、もう学ぶべき何もなくなってしまう」ということであり、また、宮本武蔵であれば、若い時からの凄まじいまでの「武芸の修行」を何十年と続けてきたが、それが、突然、まさに「ばたつと止まってしまい、もう学ぶべき何もなくなってしまう」ということである。それこそは、その人にとつての、まさに「最究極地点」(つまりは「極みの地点」)へと到達したということである。

五、晩年

さて 甘蠅師の許を辞してから四〇年の後、紀昌は静かに、誠に煙のごとく静かに世を去った。その四十年の間、彼は絶えて射を口にする事が無かった。口にさえしなかつた位だから、弓矢を執つての活動などあるはずが無い。もちろん、寓話作家としてはここで老名人に掉尾の大活躍をさせて、名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたいのは山々ながら、一方、また、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。実際、老後の彼についてはただ無為にして化したとばかりで、次のような妙な話の外には何一つ伝わってはいないのである。

その話というのは、彼の死ぬ一、二年前のことらしい。ある日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行ったところ、その家で一つの器具を見た。確かに見憶えのある道具だが、どうしてもその名前が思出せぬし、その用途も思い当らない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと。主人は、客が冗談を言っているとのみ思つて、ニヤリとどぼけた笑い方をした。老紀昌は真剣になつて再び尋ねる。それでも相手は曖昧な笑いを浮べて、客の心をはかりかねた様子である。三度紀昌が真面目な顔して同じ問いを繰返した時、始めて主人の顔に驚愕の色が現れた。彼は客の目を凝乎と見詰める。相手が冗談を言っているのではなく、気が狂っているのでもなく、また自分が聞き違えをしているのでもないことを確かめると、彼は、ほとんど恐怖に近い狼狽を示して、吃りながら叫んだ。「……ああ、夫子が、——古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや? ああ、弓という名も、その使い途も!」

その後当分の間、邯鄲の都では、画家は絵筆を隠し、楽人は瑟の弦を断ち、工匠は規矩

を手にするのを恥じたということである。(これは、自分の「技量」《腕前》などを他人に自慢して得意がるようなことを心から恥じたということである。)

六、結び

例えば、われわれ人間というのは、一般的に、実に様々な「欲望」などを他人よりも少しでも多くむさぼることが「幸せ」なこととして、そのような「方向」に向かって多くの人たちが努力をしている傾向が強いかと思う。その結果、巨万の富を築き、豪邸に住み、ハーレムのような生活をし、また、社会的地位をも極め、そして、数知れぬ「榮譽」も授かることによって、これでこの世の「人生を極め尽くした」と密かに自負することにもなるのだろう。それは、この世のありとあらゆる「欲望」を満たすという「極み」に達したということである。そして、そのような「価値観や人生観」などを持つ人たちから見れば、ソクラテスやシャカ或いはイエス・キリストなどは、なんとも「かわいそうな人たち」という印象になるのかも知れない。しかし、たとえそのような恵まれた「環境」にあつたとしても、われわれ人間が生まれながらに宿している、いわゆる「四苦」(つまりは「生・病・老・死」の宿命から逃れることはできない)とともに、また、「人の心」も、自分の思い通りには少しもならないものである。それゆえ、その人の「悩みや苦しみ」などは、なおも永々として死ぬまで続くことになるのである。

一方、ソクラテスやシャカ或いはイエス・キリスト、その他、そのような人たちというのは、いわゆる「欲望」を満たすという方向ではなく、むしろその「欲」から離れて、いわゆる「内的成長」(或いは「内的充実」)をめざすという方向であり、そして、真に「内的成長」(或いは「内的充実」)を遂げるならば、それは、一方の「極み」に達するということであり、例えば、「仏教」(その中の「小乗仏教」)においては、いわゆる「悟りを開くこと」(それは、大空おおぞらのような無色透明な「心」《無垢の心》)を取り戻すことであるが、それとともに、「心の自由」を得て、まさに「自ら考え、自ら判断し、自ら行動できるような、そういう精神の自立した一人の人間として新たに誕生する」ということでもある。また、「キリスト教」においては、いわゆる「回心」(それは「神と完全に一体となる」ということであり、また、「真言密教」であれば、それは、まさに「大日如来と完全に一体となること」)であり、そして、プラトンであれば、いわゆる「善のイデア」を観て取る地点こそは、まさに「その地点」であると言ってもよいのだろう。……

そして、うそ偽りなく、真に「内的成長」(或いは「内的充実」)を遂げている「魂」であれば、「……巨万の富も、華麗な豪邸も、ハーレムのような生活も、また、この上ない社会的地位も、そして、数知れぬ『榮譽』も、すべて色褪せたものに見えて来るということ」である。——例えば、自分は、何ひとつ手にしていない。自分は、何ひとつ持たず、ほとんど身ひとつでありながら、それでも「自分だけで足りている」ということである。それは、一体、なぜなのか? それは、まさに「魂」そのものが、真に深く満たされているからである。そして、「魂」そのものが真に深く満たされると、もう「何もいらぬ」という「心的状態」になるのである。それが、まさに「涅槃の境地」であり、しかも、例えば、山ほどのごちそうを出されれば、それを心から楽しむことができ、また、セックスがしたいと思えば、セックスを楽しむこともできる。その他、この世のありとあらゆるも

のを楽しむことができ得るとともに、それらありとあらゆるものから開放されている（執着していない）ということでもある。それが、まさに生きながら「涅槃ねはんの境地」を楽しむということであり、そして、これこそは、まさに人生の「極み」そのものである、と言えるものである。……

*

*

七、名人伝（参考文献）

名人伝

趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己の師と頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとつては、名人・飛衛に及ぶ者があるうとは思われぬ。百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌は遙々飛衛をたずねてその門に入った。

飛衛は新入の門人に、まず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで、そこに仰向けにひっくり返った。眼とすれすれに機躡が忙しく往来するのをじっと瞬かずに見詰めていようという工夫である。理由を知らない妻は大いに驚いた。第一、妙な姿勢を妙な角度から良人に覗かれては困るという。厭がる妻を紀昌は叱りつけて、無理に機を織り続けさせた。来る日も来る日も彼はこの可笑しな恰好で、瞬きせざる修練を重ねる。二年の後には、遽だしく往返する牽挺が睫毛を掠めても、絶えて瞬くことがなくなった。彼はようやくやく機のの下から匍出す。もはや、鋭利な錐の先をもつて瞼を突かれても、まばたきをせぬままでになっていた。不意に火の粉が目に飛入ろうとも、目の前に突然灰神楽が立とうとも、彼は決して目をパチつかせない。彼の瞼はもはやそれを閉じるべき筋肉の使用法を忘れ果て、夜、熟睡している時でも、紀昌の目はカツと大きく見開かれたままである。ついに、彼の目の睫毛と睫毛との間に小さな一匹の蜘蛛が巣をかけるに及んで、彼はようやく自信を得て、師の飛衛にこれを告げた。それを聞いた飛衛がいう。瞬かざるのみではまだ射を授けるに足りぬ。次には、視ることを学べ。視ることに熟して、さて、小を視ること大のごとく、微を視ること著のごとくとなつたならば、来て我に告げるがよいと。

紀昌は再び家に戻り、肌着の縫目から虱を一匹探し出して、これを己が髪の毛をもつて繫いだ。そうして、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮らすことにした。毎日毎日彼は窓にぶら下つた虱を見詰める。初め、もちろん、それは一匹の虱に過ぎない。二三日たつても、依然として虱である。ところが、十日余り過ぎると、気のせいか、どうやらそれがほんの少しながら大きく見えて来たように思われる。三月目の終りには、明らかに蚕ほどの大きさに見えて来た。虱を吊るした窓の外の風物は、次第に移り変わる。熙々として照っていた春の陽はいつか烈しい夏の光に変わり、澄んだ秋空を高く雁が渡って行ったかと思ふと、はや、寒々とした灰色の空から雲が落ちかかる。紀昌は根気よく、毛髪の先にぶら下つた有物類・催痒性の小節足動物を見続けた。その虱も何十匹となく取換えられて行く中に、早くも三年の月日が流れた。ある日ふと気が付くと、窓の虱が馬のような大きさに見えていた。占めたと、紀昌は膝を打ち、表へ出る。彼は我が目を疑った。人は高塔であった。馬は山であった。豚は丘のごとく、雉は城楼と見える。雀躍して家にとつて返した紀昌は、再び窓際の虱に立向い、燕角の弦に朔蓬の籥をつがえてこれを射れば、矢は見事に虱の心の臓を貫いて、しかも虱を繫いだ毛さえ断れぬ。

紀昌は早速師の許に赴いてこれを報ずる。飛衛は高踏して胸を打ち、初めて「出かしたぞ」と褒めた。そうして、直ちに射術の奥義秘伝を刺すところなく紀昌に授け始めた。

——目の基礎訓練に五年もかけた甲斐があつて紀昌の腕前の上達は、驚くほど速い。

さて、奥義秘伝が始まつてから十日の後、試みに紀昌が百歩を隔てて柳葉を射るに、既に百發百中である。二十日の後、いっぱい水を湛えた盃を右腕の上に載せて剛弓を引くに、狙いに狂いの無いのはもとより、杯中の水も微動だにしない。一月の後、百本の矢をもって速射を試みたところ、第一矢的的に中れば、続いて飛来った第二矢は誤たず第一矢の括に中つて突き刺さり、更に間髪を入れず第三矢の鏃が第二矢の括にガツシと喰い込む。矢矢相属し、発発相及んで、後矢の鏃は必ず前矢の括に喰入るが故に、絶えて地に墜ちることがない。瞬く中に、百本の矢は一本のごとくに相連なり、的から一直線に続いたその最後の括はなお弦を衝むがごとくに見える。傍で見ていた師の飛衛も思わず「善し！」と言つた。——二月の後、たまたま家に帰つて妻といさかいをした紀昌がこれを威そうとて烏号の弓に碁衛の矢をつがえきりりと引絞つて妻の目を射た。矢は妻の睫毛三本を射切つてかなたへ飛び去つたが、射られた本人は一向に気づかず、まばたきもしないで亭主を罵り続けた。けだし、彼の至芸による矢の速度と狙いの精妙さとは、実にこの域にまで達していたのである。

もはや師から学び取るべき何ものも無くなつた紀昌は、ある日、ふと良からぬ考えを起した。——彼がその時独りつくづくと考えるには、今や弓をもって己に敵すべき者は、師の飛衛をおいて外に無い。天下第一の名人となるためには、どうあつても飛衛を除かねばならぬと。秘かにその機会を窺つている中に、一日たまたま郊野において、向うからだ一人歩み来る飛衛に出遇つた。とっさに意を決した紀昌が矢を取つて狙いをつければ、その氣配を察して飛衛もまた弓を執つて相応ずる。二人互いに射れば、矢はその度に中道にして相当り、共に地に墜ちた。地に落ちた矢が軽塵をも揚げなかつたのは、兩人の技がいずれも神に入つていたからである。さて、飛衛の矢が尽きた時、紀昌の方はなお一矢を余していた。得たりと勢込んで紀昌がその矢を放てば、飛衛はとっさに、傍なる野茨の枝を折り取り、その棘の先端をもってハッシと鏃を叩き落した。ついに非望の遂げられないことを悟つた紀昌の心に、成功したならば決して生じなかつたに違いない道義的慚愧の念が、この時忽焉として湧起つた。飛衛の方では、また、危機を脱し得た安堵と己が伎倆についての満足とが、敵に対する憎しみをすっかり忘れさせた。二人は互いに駆寄ると、野原の真中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた。(こうした事を今日の道義觀をもつて見るのは当らない。美食家の齊の桓公が己のいまだ味わつたことのない珍味を求めた時、厨宰の易牙は己が息子を蒸焼にしてこれをすすめた。十六歳の少年、秦の始皇帝は父が死んだその晩に、父の愛妾を三度襲うた。すべてそのような時代の話である。)

さて、涙にくれて相擁しながらも、再び弟子がかかる企みを抱くようなことがあつては甚だ危いと思つた飛衛は、紀昌に新たな目標を与えてその氣を転ずるにしくはないと考へた。彼はこの危険な弟子に向つて言つた。もはや、伝うべきほどのことはことごとく伝えた。爾がもしこれ以上この道の蘊奥(奥義)を極めたいと望むならば、ゆいて西の方大行の嶮に攀じ(登り)、霍山の頂を極めよ。そこには甘蠅老師とて古今を曠しゆうす

る斯道（この道）の大家がおられるはず。老師の技に比べれば、我々の射のごときはほとんど児戯（子供の遊び事）に類する。爾の師と頼むべきは、今は甘蠅師の外にあるまいと。

紀昌はすぐに西に向つて旅立つ。その人の前に出ては我々の技のごとき児戯にひとしいと言つた師の言葉が、彼の自尊心にこたえた。もしそれが本当だとすれば、天下第一を指す彼の望も、まだまだ前途程遠い訳である。己が業が児戯に類するかどうか、とにもかくにも早くその人に会つて腕を比べたいとあせりつつ、彼はひたすらに道を急ぐ。足裏を破り脛を傷つけ、危巖（険しくそびえ立つ岩）を攀じ（登り）棧道を渡つて、一月の後に彼はようやく目指す山顛（山頂）に辿りつく。……

氣負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかし酷くよぼよぼの爺さんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲つているせいもあつて、白髯（白いひげ）は歩く時も地に曳きずつている。——相手が聾（ろう）かも知れぬと、大声に遽（あわ）たしく紀昌は来意を告げる。己が技の程を見てもらいたいむねを述べると、あせり立つた彼は相手の返辞をも待たず、いきなり背に負うた楊幹麻筋の弓を外して手に執つた。そうして、石碣の矢をつがえると、折から空の高くを飛び過ぎて行く渡り鳥の群に向つて狙いを定める。弦に応じて、一箭（一つの矢で）たちまち五羽の大鳥が鮮やかに碧空を切つて落ちて来た。

一通り出来るようじゃな、と老人が穏やかな微笑を含んで言う。だが、それは所詮射之射（しょせしやのしや）というものの、好漢いまだ不射之射（ふしやのしや）を知らぬと見える。——ムツとした紀昌を導いて、老隱者（らういんじや）は、そこから二百歩ばかり離れた絶壁の上まで連れて来る。脚下は文字通りの屏風のごとき壁立千仞、遙か真下に糸のような細さに見える溪流をちよつと覗いただけでたちまち眩暈（めまい）を感じるほどの高さである。その断崖から半ば宙に乘出した危石の上につかつかと老人は駟（か）上り、振返つて紀昌に言う。どうじゃ。この石の上で先刻の業を今一度見せてくれぬか。今更引込（ひっこみ）もならぬ。老人と入代りに紀昌がその石を履んだ時、石は微かにグラリと揺らいだ。強いて気を励まして矢をつがえようとすると、ちよつと崖の端から小石が一つ転がり落ちた。その行方を目で追うた時、覺えず紀昌は石上に伏した。脚はワナワナと顫え、汗は流れて踵にまで至つた。老人が笑いながら手を差し伸べて彼を石から下し、自ら代つてこれに乗ると、では射（しや）というものをお目にかけてよかな、と言つた。まだ動悸がおさまらず蒼ざめた顔をしてはいたが、紀昌はすぐに気が付いて言つた。しかし、弓はとうなさる？ 弓は？ 老人は素手だったのである。弓？ と老人は笑う。弓矢の要る中（うち）はまだ射（しや）之射（しや）じゃ。不射（ふしや）之射（しや）には、烏漆（うしつ）の弓も肅慎（しゆしん）の矢もいらぬ。

ちよつど彼等の真上、空の極めて高い所を一羽の鳶（とび）が悠々と輪（りん）を画（えが）いていた。その胡麻粒（ごまつぶ）ほどに小さく見える姿をしばらく見上げていた甘蠅（かんよう）が、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月のごとくに引絞つてひようと放てば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石のごとくに落ちて来るではないか。紀昌は慄然（りつぜん）とした。今にして始めて芸道の深淵（しんえん）を覗き得た心地であつた。——そして、九年の間、紀昌はこの老名人の許に留まつた。その間いかなる修業を積んだものやらそれは誰にも判らぬ。

九年たつて山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付の変つたのに驚いた。以前の負けず嫌

いな精悍な面魂はどこかに影をひそめ、なんの表情も無い、木偶のごとく愚者のごとき容貌に変わっている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はこの顔付を一見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕のごとき、足下にも及ぶものでないと。――邯鄲の都は、天下第一の名人となつて戻つて来た紀昌を迎えて、やがて眼前に示されるに違いないその妙技への期待に湧返つた。

ところが紀昌は一向にその要望に応えようとしない。いや、弓さえ絶えて手に執ろうとしない。山に入る時に携えて行つた楊幹麻筋（「楊（ポプラ系統）の木で作つた弓に麻の糸を弦としたもの」）の弓もどこかへ棄てて来た様子である。そのわけを訊ねた一人に答えて、紀昌は懶げに言つた。至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなしと。なるほどと、至極物分りのいい邯鄲の都人士（みやこの人たち）はすぐに合点した。弓を執らざる弓の名人は彼等の誇となつた。紀昌が弓に触れなければ触れないほど、彼の無敵の評判はいよいよ喧伝された。

様々な噂が人々の口から口へと伝わる。毎夜三更を過ぎる頃、紀昌の家の屋上で何者の立てるとも知れぬ弓弦の音がする。名人の内に宿る射道の神が主人公の睡っている間に体内を脱け出し、妖魔を払うべく徹宵守護に當つているのだという。彼の家の近くに住む一商人はある夜紀昌の家の上空で、雲に乗つた紀昌が珍しくも弓を手にして、古の名人・羿と養由基の二人を相手に腕比べをしているのを確かに見たと言ひ出した。その時三人人の放つた矢はそれぞれ夜空に青白い光芒を曳きつつ参宿と天狼星との間に消去つたと。紀昌の家忍び入ろうとしたところ、塀に足を掛けた途端に一道の殺気が森閑とした家の中から奔り出てまともに額を打つたので、覚えず外に顛落したと白状した盗賊もある。爾来、邪心を抱く者共は彼の住居の十町四方は避けて廻り道をし、賢い渡り鳥共は彼の家の上空を通らなくなった。

雲と立罩める名声のただ中に、名人紀昌は次第に老いて行く。既に早く射を離れた彼の心は、ますます枯淡虚静の域にはいつて行つたようである。木偶のごとき顔は更に表情を失ひ、語ることも稀となり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至つた。「……既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳のごとく、耳は鼻のごとく、鼻は口のごとく思われる」というのが、老名人晩年の述懐である。

さて、甘蠅師の許を辞してから四十年の後、紀昌は静かに、誠に煙のごとく静かに世を去つた。その四十年の間、彼は絶えて射を口にする事が無かつた。口にさえしなかつた位だから、弓矢を執つての活動などあろうはずが無い。もちろん、寓話作者としてはここで老名人に掉尾の大活躍をさせて、名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたいのは山々ながら、一方、また、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。実際、老後の彼についてはただ無為にして化したとばかりで、次のような妙な話の外には何一つ伝わっていないのだから。

その話というのは、彼の死ぬ一二年前のことらしい。ある日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行つたところ、その家で一つの器具を見た。確かに見憶えのある道具だが、どうしてもその名前が思出せぬし、その用途も思い当らない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと。主人は、客が冗談を言つているとのみ思つて、ニヤリととぼけた笑い方をした。老紀昌は真剣になつて再び尋ねる。それでも相

手は曖昧な笑を浮べて、客の心をはかりかねた様子である。三度紀昌が真面目な顔をして同じ問いを繰返した時、始めて主人の顔に驚愕の色が現れた。彼は客の眼を凝平と見詰める。相手が冗談を言っているのでもなく、気が狂っているのでもなく、また自分が聞き違えをしているのでもないことを確かめると、彼はほとんど恐怖に近い狼狽を示して、吃りながら叫んだ。「……ああ、夫子が、——古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？ ああ、弓という名も、その使い途も！」

その後当分の間、邯鄲の都では、画家は絵筆を隠し、楽人は瑟の絃を断ち、工匠は規矩を手にするのを恥じたということである。(完)

*

*

「参考文献」

※底本「名人伝」中島敦（「青空文庫」）